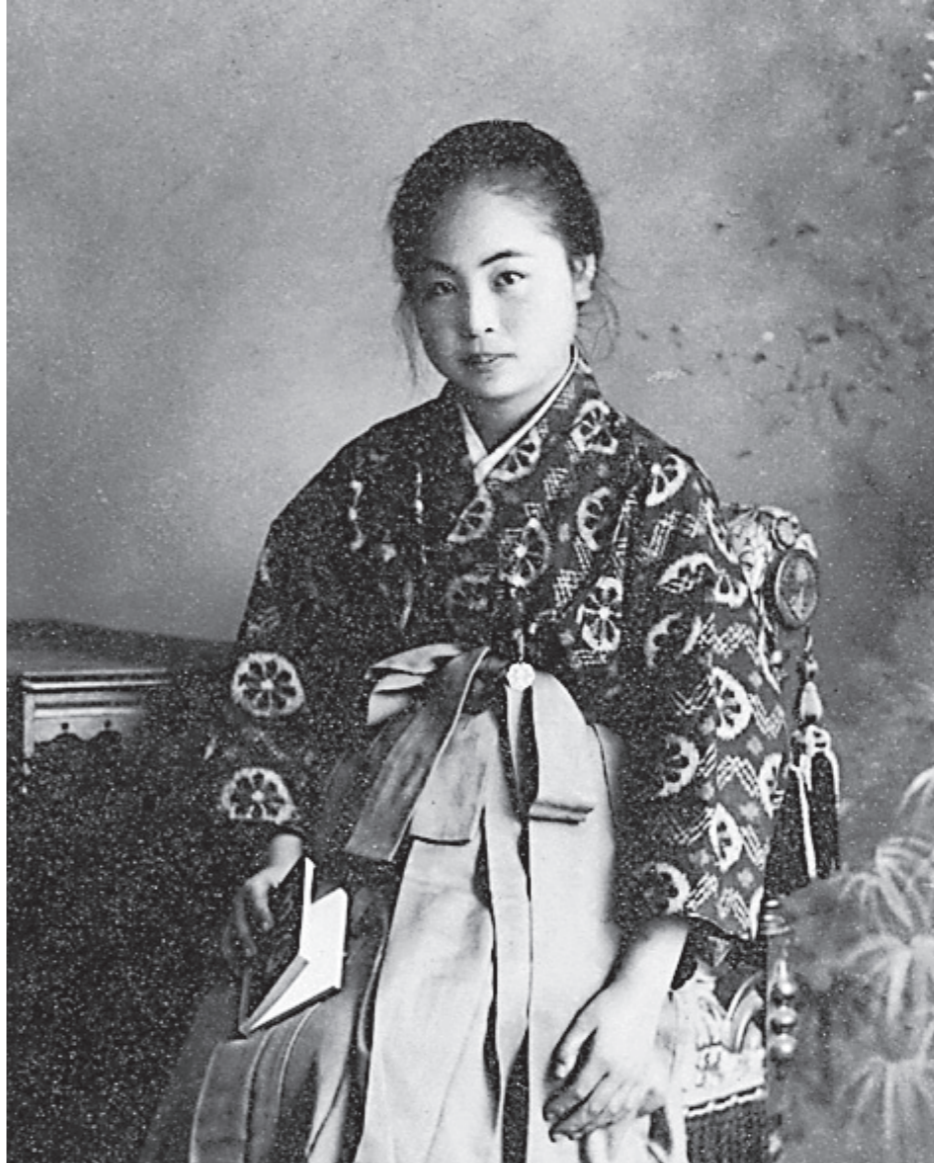


特集

みすゞさんをさがして

金子みすゞ全作品の魅りを振り返る

金子みすゞ記念館では、「金子みすゞ魅り展」と題して、矢崎節夫さん（現金子みすゞ記念館長）がみすゞさんの遺稿全編を発見し、世に送り出すまでの偶然と必然が織りなすドラマを企画展示しています。これに合わせて、みすゞさんの短い生涯と、その作品が52年の時を経て魅るまでを紙上で振り返ってみました。



▲大津高等女学校時代のみすゞさん（提供：金子みすゞ著作保存会）

みすゞさんの短い生涯

金子みすゞ（本名テル）さんは、明治36年大津郡仙崎村（現在の長門市仙崎）に生まれました。成績優秀、おとなしく読書が好きで誰にでもやさしい人であったといえます。

そんな彼女が童謡を書き始めたのは、20歳の頃からでした。4つの雑誌に投稿した作品が、そのすべてに掲載されるといふ鮮烈なデビューを飾ったみすゞさんは、「童謡」の選者であった西條八十氏に「若き童謡詩人の中の巨星」と賞賛されるなど、さまざまな活躍をみせていきました。ところが、その生涯は決して明るいものではありませんでした。23歳

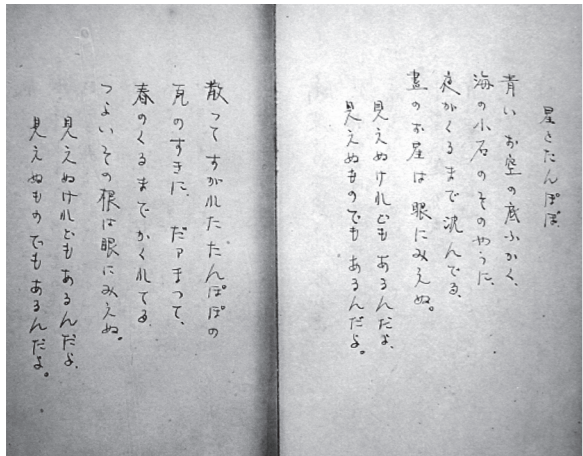
で結婚したものの、文学に理解のない夫から詩作を禁じられてしまい、さらには病氣、離婚と苦しみが続きました。ついには、前夫から最愛の娘を返すよう迫られ、娘を奪われなために自死の道を選び、26歳という若さでこの世を去ってしまいました。こうして彼女の作品は散逸し、いつしか幻の童謡詩人と語り継がれるばかりとなってしまいました。

それから50余年。長い年月埋もれていたみすゞさんの作品は、児童文学者の矢崎節夫さん（現金子みすゞ記念館長）の熱意により再び世に送り出され、今では小学校の教科書に掲載されるまでになり、日本中、そして世界中の人たちに愛されるようになりました。

「金子みすゞ」が魅るまで

「みすゞ探しの旅」は、昭和41年、大学一年生だった矢崎青年がひとつの詩に出会うところから始まります。その詩は、今でこそ有名なあの詩、「大漁」でした。これを初めて読んだとき、その作者の深くやさしいまなざしに触れた矢崎青年は、強く心を動かされたのです。

次に矢崎さんが、みすゞさんに出会うのは、2年後の大学3年生のとき。出版社でアルバイトをしていた矢崎さんは、詩人の佐藤義美さんのところに原稿を取りに行ったとき、その原稿の中にみすゞさんの「つゆ」



▲みすゞさんの字（提供：金子みすゞ著作保存会）

という作品を見つけます。このとき矢崎さんは、佐藤さんから、みすゞさんが山口県下関に住んでいた女性であること、当時華々しい活躍をしていたこと、そして26歳という若さで亡くなっていること、さらに彼女の詩集が3冊の手帳にまとめられ、西條八十氏の手元にあることを知らされます。早速、矢崎さんは西條八十氏の親族に手紙を送りますが、その返事は来ず「みすゞ探し」は壁に突き当たってしまいます。

それから2年後、矢崎さんは「金子みすゞ童謡集『繭と墓』」に出会います。これは、みすゞさんの詩30編を集めたもので、「大漁」と「つゆ」しか知らなかった矢崎さんにとって

は、宝の山のようなものでした。この本により、みすゞさんが下関の「商品館」という建物に入っていた本屋で働いていたことがわかりました。その後、何の手がかりもなく10年の時が過ぎ、あきらめかけていたときのこと。矢崎さんの中学時代の友人が下関にいたことから、年に数回下関に出かけるようになり、矢崎さんは、下関に出かけるたびに、みすゞさんを知っている人を探しましたがなかなか見つかりませんでした。そんなとき、ふと「金子みすゞ童謡集『繭と墓』」に出ていた「商品館」

のことを思い出したのでした。そして、下関の友人に、商品館に店を出していた本屋を探してくれるように頼みました。すると、下関の友人からすぐに、「みすゞのいとこにあなたが見つかつた」と知らせがありました。その人に連絡をとると、「東京に上山雅輔というみすゞさんの実の弟がいるのでそちらに聞いた方が詳しいことがわかるだろう」と言われたのでした。

さつそく次の日、矢崎さんは上山さんに連絡を入れました。すると、電話口の上山さんは「みすゞは私の姉です。何か残っているかもしれないので探してみます。一週間ほど時間をください」と話したのでした。そして、一週間もたたずに、上山さんから「姉の原稿と写真が見つかったので来てほしい」と連絡が入りました。矢崎さんが、指定の日時に上山さんを訪ねると、上山さんは、3冊の手帳とみすゞさんの写真を見せてくれました。みすゞさんは、同じ3冊の詩集を2つ作り、ひとつは西條八十氏のもとへ送り、もうひとつを上山さんに託していたのでした。

3冊の手帳には、それぞれとびらに「美しい町」「空のかあさま」「さみしい王女」とタイトルが書かれており、512編の作品が丸みを帯びた

みすゞさん自身の肉筆で書かれました。それが、矢崎さんが金子みすゞさんの全作品に巡り会った瞬間でした。この時、「みすゞ探しの旅」を始めてから実に16年の歳月が経過していたのでした。

この2年後の昭和59年2月、多くの人たちの善意により、「金子みすゞ全集」が出版されました。そして、みすゞさんの詩は瞬く間に人々の心を捉えていったのでした。

みすゞさんの詩が現代に甦ったのは、こうした矢崎さんの奇跡的な発見はもとより、上山雅輔さんが姉みすゞさんを大切に思い、手帳を大事に保管していたからなのです。



▲上山雅輔さんが大切に保管していた3冊の手帳



▲みる公園にある「わたしと小鳥とすずと」の詩碑

「あなたと私」です。実は、この一行がとても大事なのです。みんなちがつて、みんないい。“という、うれしい言葉に出会うためには、自分中心の「私とあなた」ではなく、「あなたと私」にまなざしを変えなければいけないのです。なぜなら、「私とあなた」という自分中心の人が、「みんなちがつて、みんないい。“という時は、他者の前に自分を主張して、私の勝手にしようとなってしまうからです。」「みんなちがつて、みんないい。“は、「他者を認め、違いを認め、共に生

きる」ことなのです。ですから、このうれしい言葉が生まれる大前提の「あなたと私」というまなざしを、みるさんの作品を読むことで、みんなが思い出し、心にきちんと置くことができたら、人を貶めたり、いじめたり、傷つけたりすることはなくなるし、戦争すら、地球上からなくなるに違いありません。みるさんの作品は、平成八年からは日本中の小学生が国語の教科書の中で出会っています。今では、二十代前半の人は一度は出会っている時代になりました。みるさんのまなざしに終りはなく、これからさらに大きく広がっていくでしょう。すでにこの十年で世界十カ国語に訳され、その国で出版されています。アメリカの人は、「みるさんのまなざしが必要なのは私たちの国です」と語り、「積った雪」を読んで、「日本人はこんなに深いまなざしを持っているのか」と驚いたネパールの中学校の校長先生は、授業にとり入れ、四川省の大地震で両親を亡くした小学生的の心ケアに、中国語のみるさんの作品を使っている中国の先生もいます。ふるさとの大切なまなざしを、日本中に、そして世界へと大事に手渡していきたく強く思っています。

みるさんのまなざし

「あなたと私」

金子みるさん記念館 館長 矢崎節夫さん

ふるさとのまなざし

金子みるさんが生まれ育った仙崎・長門・北浦地域の人々が昔から持っていたのは、「あなたと私」という、相手に心を添える、深くてやさ

しいまなざしです。

「あなたと私」のあなたは、人間だけではありません。命あるものすべてに向けられています。鯨墓や向岸寺の鯨の過去帳がその代表です。みるさんの父方の親戚である網元のおじさんは、大漁の時、青い顔をして仏壇に手を合わせていたという話がありますが、これもこのまなざしの現れです。

「あなたと私」のあなたには、大人だけでなく幼い人たちも入っています。西円寺の子どものための活動、小児念仏会はその代表です。西円寺の法岸上人は、おなかの赤ちゃんに念仏を唱える胎教を実践した最初の上人とも思われますが、鯨の胎児から学んだのでしょうか。

みるさんは、ふるさとのまなざしを当時、詩の一番新しいかたち、童謡で歌ってくれた、今、日本が世界に誇れる童謡詩人です。



▲矢崎節夫さん

大漁 — 「鯉と私」



▲青海島観光基地にある「大漁」の詩碑

もしみるさんが、「私と鯉」「私とあなた」であつたら、浜はまつりの/ようだ。で終っていたでしょう。でも、みるさんは、「あなたと私」というまなざしの人ですから、

「海のなかでは/何万の/鯉のとむらい/するだろう。“と、鯉側からも歌うことができたのです。「私とあなた」は、自分を他者より上にあげてしまうので、自分中心になってしまい、まず相手を否定することから始まります。

「あなたと私」は、共に大切、共生のまなざしですから、まず相手を丸ごと認めることから入るのです。かつて、日本人の多くが、「人の痛みを自分の痛みとして思いなさい」と、両親や祖父母に教えられたのは、この「あなたと私」です。それが、二十世紀のある時から、「私とあなた」で駆け抜けてきたから、みるさんは甦り、「あなたと私」という、人間が本来持っていた大切なまなざしに気づかせてくれたのです。

みんなちがつて、みんないい

日本中の小学生が一番よく知っている「私と小鳥と鈴と」でも、「あなたと私」がきちんと書かれています。題は、「私と小鳥と鈴と」で、私が先になつていきます。しかし、「みんなちがつて、みんないい。“という、うれしい言葉の一行前は、この位置が逆転して、「鈴と、小鳥と、それから私」になつていくのです。つまり、

ながとふるさとメロディ

金子みるさん記念館

主任・企画員 草場睦弘さん

通公民館、仙崎公民館、長門市役所、湯本温泉、俄山公民館の地域では、夕方6時になると、一斉にミュージックチャイムが鳴り響きます。これは、「ながとふるさとメロディ」と呼ばれ、1990年(平成2年)、「ふるさと創生資金」をもとに作られたものです。当時、旧長門市では、その資金をもとに、甦りを始めたばかりの金子みるさんの詩に曲をつけ、チャイムとして市内に流すことになりました。

みるさんの発見者矢崎節夫さんは、「みるさんの詩は、「いのちのことや」「ころ」のことをうたった大切な詩、その詩に曲をつけていただくのは中田喜直先生しかおられない」と考えていました。中田先生は「日本のシヨパン」と呼ばれ、めだかの学校「ちいさい秋みつけた」などの作曲で有名です。

中田先生は、みるさんの詩の編に作曲されました。その中から「繭と墓」につけられた曲が、「いいことはべるのよ」と副題をつけて「ふる



▲草場睦弘さん

さとメロディ」に決まりました。選考委員の中には、「墓」ということばが出てくるのはふるさとメロディにはふさわしくないのでは、という意見もありましたが、中田先生は、「詩の最後の『いい子は羽が生え、天使になつて飛べるのよ』は、長門市から、21世紀を生きる世界のよい子たちへのメッセージです」という強い希望もあり決定されたのでした。今年「ながとふるさとメロディ」が制定されて20年、中田先生が死去されて10年の年に当たります。それを記念し、8月7日(土)、ルネッサながとで、「いいことはべるのよ」コンサートが開催されます。これを機に、みるさんの思いと、中田先生の思いをのせて、新しい長門市全域で「ながとふるさとメロディ」が夕方の空に流れたら、と願っています。